

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：34301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K21562

研究課題名(和文) 幼児期・児童期前期における自己評価変動モデルの構築

研究課題名(英文) Self-evaluation fluctuation processes in early childhood

研究代表者

渡辺 大介 (Watanabe, Daisuke)

大谷大学・教育学部・講師

研究者番号：70612985

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：自己評価の変動を規定する要因として活動に対する自己関与度と友人関与度(自己あるいは友人がその活動を好きか否か)を取り上げ、子どもが自己と友人の能力を認知する際に生起する一連の自己評価変動過程を明らかにすることを目指した。自己と友人の能力認知に関する質問および能力認知の際に喚起される感情について質問を行った。その結果、幼児は活動に対する自己関与度および友人関与度に応じて能力認知を変化させること、友人が自己より優れている場合でもネガティブな感情だけでなくポジティブな感情も喚起させることなどが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

低年齢児を対象とした、自己と他者の能力認知を含む社会的比較の研究は少なく、その点において本研究は、低年齢児の社会的比較に関する研究や、能力に関連した自己概念・他者概念の獲得に関する研究に新たな知見をもたらす非常に特色のある研究である。また、日本の子どもは自己評価・自尊感情が低いことが度々報告されている。自己評価の低さは種々の否定的状況を引き起こすため、自己評価変動過程を明らかにすることで、子どもが自己評価を高く保ち、健全な生活を送る上で必要な支援を提供できると考える。

研究成果の概要(英文)：This study examined a series of processes that cause self-evaluation to fluctuate when children recognize the abilities of themselves and of their friend. Questions were asked regarding the subject's perception of their and their friend's ability in the high/low relevant activity to themselves and their friend, as well as the emotions produced during the perception of these abilities. As a result, it was found that the perception of abilities by young children fluctuates based on the levels of relevance by themselves and their friend and that both negative and positive emotions arise when the friend has better abilities than the subject.

研究分野：発達心理学

キーワード：幼児 能力認知 自己評価 感情 友人関係

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

自己評価は自己の能力を認知し他者の能力と比較することで変動する。たとえば、「僕は鉄棒が苦手だが、A君は得意だ」といった自己と他者の能力比較を通じて、優越感や劣等感などの自己評価の変動が生じる。このような能力認知に伴う一連の自己評価変動過程は、児童期後期以降の子どもにはよく見られるが、それ以前の時期の子どもについてはどうだろうか。こうした疑問を背景にして、研究代表者はこれまでに、Tesserの自己評価維持 (Self-Evaluation Maintenance: SEM) モデルを参考に、幼児期および児童期前期の自己と他者の能力認知と自己評価の変動との関連を明らかにすることに取り組んできた。

SEMモデルは、人が肯定的な自己評価を維持しようとする動機付けを持ち、自己評価が他者の活動の遂行レベルに影響を受けることを前提とする。このモデルは、比較過程と反映過程を想定し、両心理過程の生起は、他者との心理的距離、活動への関与度、自己と他者の遂行レベルの3変数に規定される。比較過程では、自己関与度の高い活動(個人に重要な活動)で自己の遂行が友人(心理的距離の近い他者)に優る場合に自己評価が高揚し、劣る場合に自己評価が低下する。反映過程では、自己関与度の低い活動で友人の遂行が自己に優る場合に自己評価が高揚する。また、SEMモデルの自己評価維持過程は直接測定できないため、自己評価の変動を捉えるには併せて喚起される感情に注目する必要がある。そして、SEMモデルは児童期後期以降の自己と他者の能力認知と自己評価の関係を説明する。

このような理論を背景に、研究代表者は幼児期・児童期前期の自己と他者(友人および非友人)の能力認知と自己評価の変動について検討を重ね、主に以下の3点を報告した(渡辺, 2012; 渡辺・湯澤, 2012; Watanabe & Yuzawa, 2013): 自己の能力を低く認知する幼児は友人の能力を高く認知し、自己の能力を高く認知する幼児は友人の能力を低く認知するといったように、幼児期においても自己と他者の能力認知の間の密接な繋がりがあ。幼児は、他者に劣る場合には否定的感情が喚起されることを理解しているが、児童期後期以降とは異なり、比較対象が友人だと、自己が劣っていても否定的感情を喚起させにくい。つまり、能力認知に伴う心理過程が幼児期と児童期後期以降で異なっている可能性がある。SEMモデルが想定する自己評価変動過程が発達段階に応じて変化する可能性がある。要するに、研究代表者の一連の研究では、幼児期や児童期前期の子どもでも自己と他者の能力を比較し、それによって自己評価が変動することを明らかにできた。しかし、その時期特有の心理過程(幼児期や児童期前期の自己評価変動過程を規定する特有の要因)については明らかになっていなかった。

2. 研究の目的

本研究は、能力認知に伴う一連の自己評価変動過程に関して、自己評価変動過程を規定する要因を特定し、幼児期や児童期前期特有のモデルを構築することを目的とした。その際、自己と友人との関係が能力比較や自己評価変動に影響を及ぼすとの示唆から、自己評価変動過程を規定する要因として、活動に対する自己関与度に加えて、活動に対する友人関与度を上げた。また、日本の幼稚園や保育所は欧米など諸外国とは異なる友人観を持つという指摘があるため、文化差の観点も取り入れて検討を行った。

3. 研究の方法

研究1では、活動に対する関与度が能力認知とどのように関連しているかを検討するために、幼稚園の年長児(平均月齢76.1か月)を対象に、対象児およびその友人の好きな活動(高関与度活動)と嫌いな活動(低関与度活動)に関する自己と友人の能力認知について質問を行った。研究2では、幼児が自己と友人の能力を認知する際に働く心理過程について検討するために、幼稚園の年長児(平均月齢75.6か月)を対象に、活動に対する自己関与度、活動に対する友人関与度、自己と友人の遂行レベルの3変数を組み合わせた8種類の架空の自己評価変動状況(自分が好きな遊びを友人が自分より上手にできた場合など)においてどのような感情が喚起されるかを尋ねた。研究3では、カナダ人幼児(平均月齢55.2か月)に研究1, 2と同様の調査を行い、文化差の検討を行った。

4. 研究成果

研究1 自己および友人に対する各能力認知で『とても得意』と回答した場合を「4点」、『まあまあ得意』と回答した場合を「3点」、『まあまあ苦手』と回答した場合を「2点」、『とても苦手』と回答した場合を「1点」とした。活動への関与度別の能力認知得点の平均値および標準偏差をTable1に示した。能力認知と活動への関与度の関連を検討するために、自己の能力認知得点と友人の能力認知得点間で関与度ごとに対応のあるt検定を行った。その結果、高自己関与度活動と低友人関与度活動においては、自己の能力を友人の能力よりも有意に高く認知した(高自己関与度: $t(55) = 3.79, p < .01$; 低友人関与度: $t(38) = 2.35, p < .05$)。他方、低

Table1 日本人幼児による各能力認知得点の平均値 (SD)

		自己の能力	友人の能力
自己関与度	高	3.79 (0.49)	3.23 (0.96)
	低	1.82 (1.01)	2.67 (1.10)
友人関与度	高	3.35 (0.85)	3.67 (0.66)
	低	2.74 (1.13)	2.18 (1.17)

自己関与度活動と高友人関与度活動においては、自己の能力を友人の能力よりも有意に低く認知した（低自己関与度： $t(54) = -5.25, p < .01$ ；高友人関与度： $t(47) = -2.34, p < .05$ ）。また、自己と友人の好きな活動が一致した幼児は 17 名おり、そのうち自己の能力を友人の能力よりも高く認知した幼児は 1 名（5.9%）、自己と友人の能力を同程度に認知した幼児は 13 名（76.5%）、自己の能力を友人の能力よりも低く認知した幼児は 3 名（17.6%）であった。

自己の好きな活動では自己の能力を友人の能力よりも高く認知し、自己の嫌いな活動では低く認知した結果は、先行研究と同様であり、SEM モデルで想定される比較過程と反映過程が幼児にも生起し、能力認知によって自己評価の高揚が生じることを示唆するものであった。一方、友人の好きな活動では友人の能力を自己の能力よりも高く認知したが、これは、親密な関係を維持するために友人を好意的に捉えようとする特徴の現れと推測される。好きな活動が一致した場合に、自己と友人の能力を同程度と認知した幼児が多かったことから、友人が（自己と同程度に）優れていると見なす傾向は、関係性や自己評価の維持に重要な役割を果たしていると言える。他方、友人の嫌いな活動で友人の能力を自己の能力よりも低く認知した点については、友人関与度の低さから、関係性維持に重要ではないと考え、シビアに回答したとも考えられる。

研究 2 予備調査として、自己評価の変動に伴う種々の感情を明らかにする際に必要な刺激の作成を目的とした調査を行い、感情を表現する言葉やその言葉と結びつく表情、そして喚起する状況を幼児がある程度理解していることが示唆された。予備調査で得られた結果ならびに本郷ら（2017）の方法をもとに、本調査で使用する 6 種類の感情語（うれしい、かなしい、おこった、はずかしい、こまった、くやしい）の選別を行い、各感情を表す表情図を作成した（Figure1）。

本調査では、活動に対する自己関与度（自分が好きな遊び or 嫌いな遊び）、活動に対する友人関与度（友人が好きな遊び or 嫌いな遊び）、自己と友人の遂行レベルの 3 変数を組み合わせた 8 種類の架空の自己評価変動状況（自分が好きな遊びを友人が自分より上手にできた場合など）においてどのような感情が喚起されるかを尋ね、表情図を指差す形で回答してもらった。活動に対する関与度別の活動の遂行レベルと感情の関係を検討するために² 適合度の検定を行った（Table2）。その結果、活動に対する

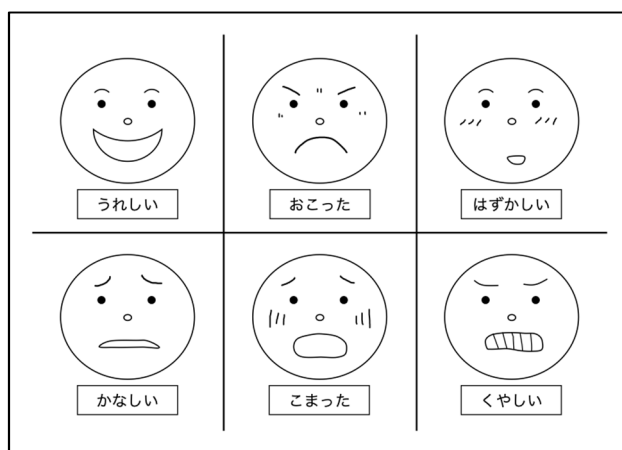


Figure1. 研究 2 で使用した表情図

		うれしい	かなしい	くやしい	はずかしい	おこった	こまった	² 適合度の検定（下段は多重比較結果）
自己関与度	高 自己>友人	36 (81.8%)	2 (4.5%)	2 (4.5%)	1 (2.3%)	1 (2.3%)	2 (4.5%)	$\chi^2(5) = 134.61, p < .01$ うれ>かな, くや, はず, おこ, こま
	自己<友人	9 (20.0%)	11 (24.4%)	12 (26.7%)	6 (13.3%)	2 (4.4%)	5 (11.1%)	$\chi^2(5) = 9.80, n.s.$
	低 自己>友人	28 (63.6%)	2 (4.5%)	1 (2.3%)	4 (9.1%)	3 (6.8%)	6 (13.6%)	$\chi^2(5) = 71.90, p < .01$ うれ>かな, くや, はず, おこ, こま
	自己<友人	14 (31.8%)	7 (15.9%)	13 (29.5%)	5 (11.4%)	1 (2.2%)	4 (9.1%)	$\chi^2(5) = 18.18, p < .01$ うれ, くや>おこ
友人関与度	高 自己>友人	29 (64.4%)	2 (4.4%)	2 (4.4%)	7 (15.6%)	3 (6.7%)	2 (4.4%)	$\chi^2(5) = 76.45, p < .01$ うれ>かな, くや, はず, おこ, こま
	自己<友人	13 (28.9%)	10 (22.2%)	7 (15.6%)	6 (13.3%)	1 (2.2%)	8 (17.8%)	$\chi^2(5) = 10.86, n.s.$
	低 自己>友人	28 (68.3%)	3 (7.3%)	1 (2.4%)	2 (4.9%)	2 (4.9%)	5 (12.2%)	$\chi^2(5) = 80.01, p < .01$ うれ>かな, くや, はず, おこ, こま
	自己<友人	11 (26.8%)	9 (22.0%)	10 (24.4%)	6 (14.6%)	2 (4.9%)	3 (7.3%)	$\chi^2(5) = 10.36, n.s.$

注. 自己>友人：自己が友人より優れている場合；自己<友人：友人が自己より優れている場合

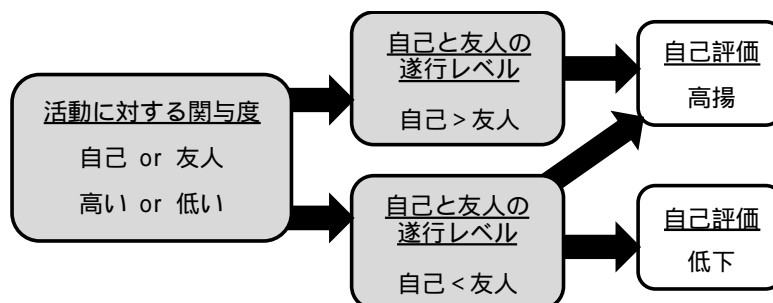


Figure2. 幼児期・児童期前期における自己評価変過程モデル

関与度にかかわらず、自己が友人より優れている場合には“うれしい”を選択することが有意に多かった。また、自己関与度の低い活動において友人が自己より優れている場合には“うれしい”と“くやしい”を選択する幼児が多かった。その他の場合に関しては有意な偏りは見られなかった。幼児は、いずれの活動においても自己が友人よりも優れていた場合にはポジティブな感情を喚起させる一方で、友人が自己よりも優れている場合には、活動に対する関与度に応じて種々の感情を生起させることが示唆される結果となった。

本研究では、能力認知場面において幼児が種々の感情を喚起させることは明らかにできたものの、感情を喚起させる要因を特定するまでには至らなかった。よって、現時点までで判明した結果をもとにした、幼児期・児童期前期における自己評価変動過程のモデルを提案する(Figure2)。

研究3 カナダ人幼児を対象に、研究1と同様の調査を行った。活動への関与度別の能力認知得点の平均値および標準偏差を Table3 に示した。能力認知と活動への関与度の関連を検討するために、自己の能力認知得点と友人の能力認知得点間で関与度ごとに対応のある *t* 検定を行った。その結果、高自己関与度活動においてのみ、自己の能力を友人の能力よりも有意に高く認知した ($t(14) = 3.73, p < .01$)。日本人幼児と異なる結果が得られた点に関しては、標本数や月齢、文化による能力認知観の違いといった理由が考えられた。最終年度(2020年)の調査での検討を予定していたが、2019年末に発生した新型コロナウイルス感染症を憂慮した調査協力園との話し合いの結果、調査を断念せざるを得なくなった。そのため、自己評価変動モデルの適合における文化差の検討については今後の課題としたい。

Table3 カナダ人幼児による各能力認知得点の平均値 (SD)

		自己の能力	友人の能力
自己関与度	高	3.67 (0.67)	2.27 (1.92)
	低	2.19 (1.23)	2.81 (1.10)
友人関与度	高	3.06 (0.86)	2.88 (1.45)
	低	2.69 (1.56)	2.69 (1.70)

< 引用文献 >

渡辺大介 (2012). 小学生における自己能力・他者能力の認知と感情喚起 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 (教育人間科学関連領域), 61, 187-196.

渡辺大介・湯澤正通 (2012). 5,6歳児における社会的比較と自己評価 教育心理学研究, 60, 117-126.

Watanabe, D., & Yuzawa, M. (2013). Assessment of one's own and others' ability by preschool Japanese children. Japanese Psychological Research, 55, 303-314.

本郷一夫・大淵守正・松本恵美・山本 信・小玉純子 (2017). 幼児の情動理解と情動表現の発達に関する研究-情動の言語表現に着目して- 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 66, 117-131.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 渡邊大介・近藤綾	4. 巻 11
2. 論文標題 幼児期における感情を表すオノマトペの理解：表情認識との関連と場面想起の分析を通じて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教職支援センター研究紀要（大谷大学）	6. 最初と最後の頁 73-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 渡邊大介・近藤綾
2. 発表標題 幼児期における感情語と表情認識の関連
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊大介・近藤綾
2. 発表標題 幼児期における自己と友人の能力認知 活動への関与度との関連
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----